

▽再建

居ても立ってもいられなかった。連絡先の手掛かりがつかめなかったからだ。加えて、嫌な予感もしていた。「無事でいてくれ」。東日本大震災の安否情報を自治体が更新するたび、目を皿のようにして旧友の名を名簿上に探した。

旧友は大学の同窓生。岩手県釜石市の郷里で学習塾を営む傍ら、石川啄木や宮沢賢治をテーマに文芸評論を続けている。地元芸術祭の受賞歴もある。血の気がうせたのは「先生を捜して」と旧友の安否を尋ねる投稿情報がインターネット上で飛び交っていたのを知ったからだ。

加盟社の編集委員をしている同窓生らの協力を仰ぎ、旧友の連絡先をしらみつぶしに当たった。携帯電話がつながることが分かったのは震災から三週間後。時間を要したのは彼が独身だったからだ。

「二十八年ぶりに声を聞かせてもらおうよ。無事で何より。津波、怖かっただろう」と切り出すと、快活な声が返ってきた。

「原付きバイクで逃げたから助かったんだ。車だったら逃げ遅れていたと思う。地震の後、釜石市内の信号が全部消え、高台を目指す車で大渋滞が起きた。俺は途中でバイクを乗り捨てた。崖の斜面を駆け上が

り、九死に一生を得た」

旧友の自宅と学習塾は全壊した。無事だった両親は津波被害を免れた親類宅に預ける一方、自らは中学校の体育館で避難所暮らしをする。当面の目標は学習塾の再開だ。

「周囲の雰囲気は『学習塾どころではない。他にやるべきことがあるだろう』という感じが強い。俺が生きていくには塾を経営しなければならぬ。街は復旧の見通しが立っても、復興できるかどうかは分からない。生活再建の自信はないよ」

旧友の声は消え入りそうになった。

彼を支援したいと話す同窓生が相次いでいる。大学の教養課程でドイツ語を第二外国語として履修した青春時代の仲間。すでに五十代。変わり種が多いためか、卒業後、同窓会が開かれる機会はなかった。旧友の被災を機に、連絡網が復活し、互いの存在が急に身近になった。

「百億円の支援金・義援金を表明したソフトバンクの孫正義さんにはなれないけれど、俺たちなりにささやかにかつ大胆に、何かできないか考えたい」

旧友は五月から首都圏の大学に週一回、通い始めた。英語を教えるためだ。彼を励ます会が同窓会を兼ね、近く催される。まずは友情再建からだ。